



「金城学院」という文化を大切に守り育て、社会に発信する

- Special Interview -



金城学院  
学院長就任インタビュー

2021年4月1日付で金城学院大学学長の小室尚子先生が第9代学院長に就任しました。

初の女性学院長として学院を新たなステージへ導く小室先生に、

学院への思い、今後の抱負などをお聞きしました。

プライベートな質問にも気さくに答えてくださり、

飾らない、温かい人柄にふれることができました。

金城学院 学院長

小室 尚子 KOMURO Naoko

金城学院中学校・高等学校を経て、金城学院大学文学部卒業。東京神学大学と米ウェスタン神学校でそれぞれ神学の修士号を取得(M.Div./Th.M.)。東京神学大学院博士課程後期課程単位取得退学。日本基督教団井草教会、富士見町教会牧師、東京女子大学准教授などを経て、2009年金城学院宗教総主事・教授に。2020年金城学院大学学長、2021年金城学院学院長に就任。

今年度より就任した金城学院 学院長、金城学院幼稚園 園長、金城学院高等学校 副校長にお話をうかがいました。

## 自分に与えられた使命を全うしたい

金城学院学院長という重責を拝命し、身の引き締まる思いですが、これも神にあって召されたもの、「召命」と受けとめています。幸い、多くの先生や職員の方々が支えてくださいますので、皆さんの助けを借りながら。というも、宗教総主事としては、幼稚園から大学院まで、学院全ての教職員の方々と関わりを持つ立場にありましたので、大学でも学部を超えて先生方との交流をさせていただいてきました。かつて大学卒業後にキリスト教センターの助手を務めていたのですが、その頃から交流が続いている先生方もおられて、東京から名古屋に戻る時は喜んで迎えてくださいました。気がついたらいつのまにか、私が学院の歴史についてよく知る人間のひとりになっていました。そんなことも学院長拝命の背景にあったのかもしれない。

## 日本の女子教育に先駆的役割を果たしたキリスト教学校

金城学院は1889年(明治22年)、米国人宣教師アニー・ランドルフが名古屋の地に小さな私塾を開いたのが始まりです。女性に学問は不要とされ、女性が男性の付属品のように扱われていた時代に、立ち遅れていた日本の女子教育に力を注ごうと決意されたのです。宣教師の方々がキリスト教の思想に基づき、新しい人格主義による女性観を若い女性たちに教えたことは、日本人の世界観、価値観を変える原動力にもなりました。自ら考え、行動できる女性、相手の立場を理解し共に立つことのできる女性を育てるという建学の精神は、いかなる時代にあっても本学が堅持してきたことであり、これからも目指すものです。

ただ残念なことに、政治や経済分野への女性進出が進まないことでもわかるように、ジェンダーギャップの克服については世界の中で日本は大いに立ち遅れています。女性たちの中にもアンコンシャス・バイアス(無意識の思い込み)がかかっている、女性は男性の一步後ろに下がって責任のあることは男性にやってもらえばいい、家庭にあつては自分が家事をやらなくてはいけない、というような考えを持ってしまいがちです。しかし、神は男性も女性も対等に生きていくものとして私たちを造ってくださいました。それを女性はまず自覚しなければなりません。ひとりの人格を持つ女性としてどう生きていくのか、その立ち方をしっかり教えていくことが、女子校の役割だと思っています。

## 中学時代のキリスト教との出会いが人生を変えた

小学校の担任の先生の強い勧めで金城学院中学校に入学しました。おてんばな子でしたから、両親は金城に入れば少しはお淑やかになるだろうと思ったのかもしれませんが。当時は先輩にも同級生にもクリスチャンがたくさんいて、大きな影響を受けました。「自分が

生きていることにどういう意味があるのか」「病気や事故で亡くなる人がいるのに、なぜ自分は生きているのか」など、生きる意味に関心をもち始め、教会に真面目に通うようになりました。洗礼を受けたのは高校1年のクリスマス。家族はキリスト教とは全く関係のない家でしたが、「自分で決断したことなら、責任を持ってその信仰を貫け」と、親は反対しませんでした。ふり返れば、人生を導いてくださる素晴らしい先生、先輩、同級生との出会いに恵まれた学生生活でした。なかでも初代宗教総主事の富田望先生には多くの教えを受け、先生が90代半ばで天に召されるまで交流が続きました。



## 「金城学院」という文化に接し、豊かな人間性を育ててほしい

生徒3人で出発した学校も、現在は幼稚園から大学院まで、7,000名を超える園児、生徒、学生を擁する総合学園に成長。建学の精神は多くの困難を乗り越えて受け継がれています。社会の在り方が大きく変容する今だからこそ、教職員を含め、本学院で学ぶ一人ひとりが、この建学の精神にもう一度立ち返り、理解し、金城学院という文化を共有する、そのサポートをしていきたいと考えています。これも幸いなことに、中高校長の長屋頼子先生も、幼稚園園長の児玉芽先生も本学院の卒業生で、熱意を持って教育に取り組んでおられます。お二人との連携をいっそう強め、金城学院という文化を活かした女子教育で、豊かな心と知性を備えた女性を社会に送り出したいと願っています。



Question

### オフタイムの過ごし方は?

会議、会議で、プライベートな時間がほとんどないのです。時間があれば好きな舞台を観に行きたいのですが、今はそれも叶いません。歌舞伎、演劇、ミュージカル、なんでも好きです。実は邦楽も好きで、6歳の時からずっと箏と三弦を習ってきて、人にも教えていました。でも、もっと深く神学を研究したいと東京神学大学への入学を決めた時にそれも封印。以来、箏も三弦も触っていません。

神様の愛を基に保育にあたっていく。  
 今までも、これからも、変わらずに



金城学院幼稚園  
 園長就任インタビュー

金城学院幼稚園 園長

児玉 芽 KODAMA Megumi

1984年金城学院大学 家政学部 児童学科卒業。1984～1991年金城学院幼稚園に教諭として勤務。2007～2018年瀬川保育園保育士を経て2018年4月金城学院幼稚園教諭に着任。2019年には同園副園長、2021年4月に同園園長に就任。2017年より金城学院大学 人間科学部 現代子ども学科(現 現代子ども教育学科)の非常勤講師も兼任。  
 日本保育学会での発表や保育専門誌への執筆、子育て講座の講師なども精力的にこなし、自身の研究成果や保育への思いを伝える。

## 子どもたちの自発的な遊びを通して 主体的な生活を支える

本園のスクールモットー「愛され、育ちあう。」には、神様に愛されるかけがえのない一人ひとり(子どもだけではなく大人も)が自分と異なる相手を認め、関わりあい、育ちあう、という思いが込められています。それを実践する保育が「子どもたちの自発的な遊びを通して主体的な生活を支える」であり、「縦割りのクラス編成」です。私の考える子どもたちの主体的な生活とは「きょうは○○ちゃんと××してあそぼう」という、つもりを持って登園し、仲間と話し合いながら自分たちで園生活を組み立てられるような生活。5歳児として卒園する頃には協同的な遊びが成立したり、子どもたちが集団で遊びを生み出したり、主体的な毎日を過ごすことができるような姿になる、ということです。本園ではこうした主体的な遊びや生活を、異年齢(3・4・5歳児)の関わりの中で実践しています。もともと人間は異年齢で社会を作り、支えあい、学びあって暮らしてきたからです。

## 遊びは主体的・対話的で深い学び (アクティブラーニング)そのもの

2018年改定の新教育要領では、子どもたちの発達や学びが連続性を持っていることを踏まえ、幼児期の探求心や意欲、創造性、感情のコントロール、粘り強さなどの「非認知能力」を育むことが、その後の学びと関わる大事な点である、とされました。これはまさに、今までキリスト教保育が大切に受け継いできた「目に見えないものに目を注ぐ」保育であり、「子どもたちの自発的な遊び」は、文科省が提唱する主体的・対話的で深い学びそのものです。例えば、最近ではびかびかの泥団子作りが流行っていますが、これはまさに理科の実験です。どこのどんな状態の土がいいか、水の分量、配合は？磨き方は？何日もかけ、苦労して作っても、時には落として割れてしまう。泣くけれど、やがてその挫折も乗り越えていきます。こうした遊びが出た時に、保育者がなにをどう援助するかで、子どもたちがつかむものが違ってきます。「ちょっと難しかったけど自分でできた」。そんな環境を創れるかどうか、保育者の腕の見せ所です。

## 金城学院幼稚園の目指すもの、目指してきたもの

本園は2022年に創立50周年を迎えます。社会の在り方が激しく変動するなかにあつて、新しい時代にふさわしい保育を創っていくことが求められています。本園は、いつの時代もその時代に望ましい保育を懸命に模索し実践してきました。これからも、学院の中に独立して幼稚園が置かれているという大きな特色を活かして、より豊かで多様な人間関係を築くことや、園の活動や存在をもっと見えるカタチで発信し、外に開かれた園を創るなど、その時々の子どもの姿をよく見ながら、子どもたちにとって最も望ましい保育の在り方を考え続け、実践していきたいと思っています。

これまでとは違う新たな舞台で  
たくましく、しなやかに生き抜いてほしい



## コロナ禍で見えてきたもの

昨年に続き、新型コロナウイルス感染拡大が予断を許さない状況の中で新年度を迎えました。未曾有の出来事、コロナ禍での生活は社会の抱える問題を浮き彫りにしました。目に見えないウイルスを前に、人間が作り上げた文明社会がいかに脆いものであったか、特に日本では当たり前のように捉えていた集団主義や同じ目線で同じ歩調で進んでいくことの正しさ、美德というような一律的な価値判断に一石を投じました。危機や課題を前にそれを適切に克服していく力、個々の創意工夫の必要性が叫ばれるようになったのです。また、コロナに翻弄された月日は新たな社会の存り方を考えさせる良い機会にもなりました。たとえば人との距離の取り方。ソーシャルディスタンスという言葉に象徴されるように、人と人との適切な距離の取り方や関係のあり方の見直しが図られました。本校では「将来は医療機関で活躍したい」「国際協力の仕事に携わりたい」という想いを抱く生徒が多く出てきました。コロナ禍での1年が、社会状況を冷静に客観的に見て自らを見つめ直し、他者を慮る心(隣人愛)を育む時間にもなったのだと思います。

## 新しい時代に必要な 3つの力「科学的思考」「表現」「協働」

コロナ禍を契機にリモート、オンラインなど新しい形での人間同士のつながり方が一気に普及。合わせてAI(人工知能)が人間の頭脳を凌駕し、社会構造を一変させると言われているこの時代にあって、求められるのは未来社会にしっかりと自分の立ち位置を見つけて生きていく力です。そこで必要となるのが、いま教育改革のキーワードとしてあげられている「思考力」「判断力」「表現力」なのだろうと思います。そしてその3つのキーワードを本校独自の探究授業プログラム「Dignity」をはじめとするさまざまな教育に当てはめ、落とし込んで標準化されたものが、金城学院中高で身につけてもらう3つの力「科学的思考」「表現」「協働」なのです。柔軟に多面的に物事を捉え、批判的観点から分析して腑に落としていく、あるいは疑問、課題を見つけて探求していく、そしてその結果や自分の考えを他者との確に共有し、協調して解決していく。社会に参画し、主体的に育っていく女性として、その活躍の基盤となる素養をしっかりと培ってみたいと思っています。

今年から大学入学共通テストが始まりました。高大接続改革の目玉として位置づけられていた新テストですが、その改革の旗頭的な変更ポイントであった記述問題や英語成績提供システムの導入が紆余曲折の末、見送り。受験生も学校現場も振り回されましたが、今後の新たな社会の担い手に求められるスキル、能力の在り様が変わったわけではありません。生徒達には、一通りの正解しかない単純な社会とは違う新たな舞台で、たくましく、しなやかに生き抜いていける力を身につけてもらいたいと願っています。



金城学院高等学校  
副校長就任インタビュー

金城学院高等学校 副校長

**植木 隆伸** UEKI Takano

1967年横浜市生まれ。大阪外国語大学(現 大阪大学外国語学部)卒業。一般企業に勤務後、1999年に金城学院中学校に教諭として赴任。2006年より高等学校の英語科教諭に。2021年4月金城学院高等学校副校長に就任。